

## 審査の結果の要旨

氏名 豊田 香

専門職大学院制度が発足して15年になる。その教育理念には「理論と実践との架橋」が掲げられ、大学と社会(業界・職能集団)との間で、育成される人材を媒介とした「知識の(相互)移動」が目指されてきた。

しかし現実には、そのあるべき姿は定まっていはいない。その要因は、専門職大学院での教育が経験的な知識の高度化という意味で教養教育的性格が強く、教育目標も多種多様であり、また学習成果の評価を市場が保障せず、社会人大学院生が自らの学習成果を労働市場で価値づけることが困難であることによる。

本研究はこれらの課題を背景として、専門職大学院とくにビジネススクールにおける知識移動の在り方を、その制度の構造を分析すること(マクロ視点)、および文化心理学の考え方を背景とした複線径路等至性アプローチに基づく分析により、学習者の変容をとらえること(ミクロ視点)で、検討しようとするものである。

本論文の構成と内容は、以下の通りである。序章では上記のような研究課題と視点が設定される。第1部(第1章・第2章)では、マクロ視点によるビジネススクールと社会との知識移動が主題化される。まず、ビジネススクール導入時に参考にされたアメリカの省察的実践論が検討され、組織内の目標達成を規準として行為と反省を繰り返す知識生成の在り方(シングルループ)ではなく、専門家を媒介とした市民の経験知から大学の研究知への課題提起と知の社会還元という二重の筋道(ダブルループ)の形成が指摘される。これに対して、日本型ビジネススクールにおける知識移動では、研究知と経験知の間に介在する実践現場での科学技術の試行錯誤ループが重要な役割を果たしており、ビジネススクールでこの中間的なループ(科学技術ループ)を制度化することの重要性が指摘される。本研究ではこれをトリプルループモデルと呼ぶ。

第2部(第3章～第7章)では、ミクロ視点つまりトリプルループモデルにおける個人の知識移動の在り方を検討するために、複線径路等至性アプローチを用いて、学習者の内面で知識がどのように移動し、どのように意味づけられて、アイデンティティ化されていくのかが分析される。社会人院生は学習過程で、経験知を学習資源として職場で応用しつつ、理論と接合させる試行錯誤(科学技術ループ)を繰り返しており、経験知だけでなく研究知に価値を見出し、理論を探索し職業に活かすことに自己の社会的存在を感じる学習経験が生成されていることが指摘される。

終章では、日本型ビジネススクールの在り方として求められるのは、トリプルループモデルとして示される省察的実践における知識移動のハブ機能であると結論づけられる。

以上のように、本論文は、日本の専門職大学院ビジネススクールの在り方を大学と社会との間の知識移動の観点から検討し、トリプルループの学習・変容過程が構造的に存在することを明らかにしており、専門職大学院研究に新たな視点と知見をもたらすものである。よって、本論文は博士(教育学)の学位を授与するに相応しい水準にあるものと判断された。